艷本

夢隨筆

上

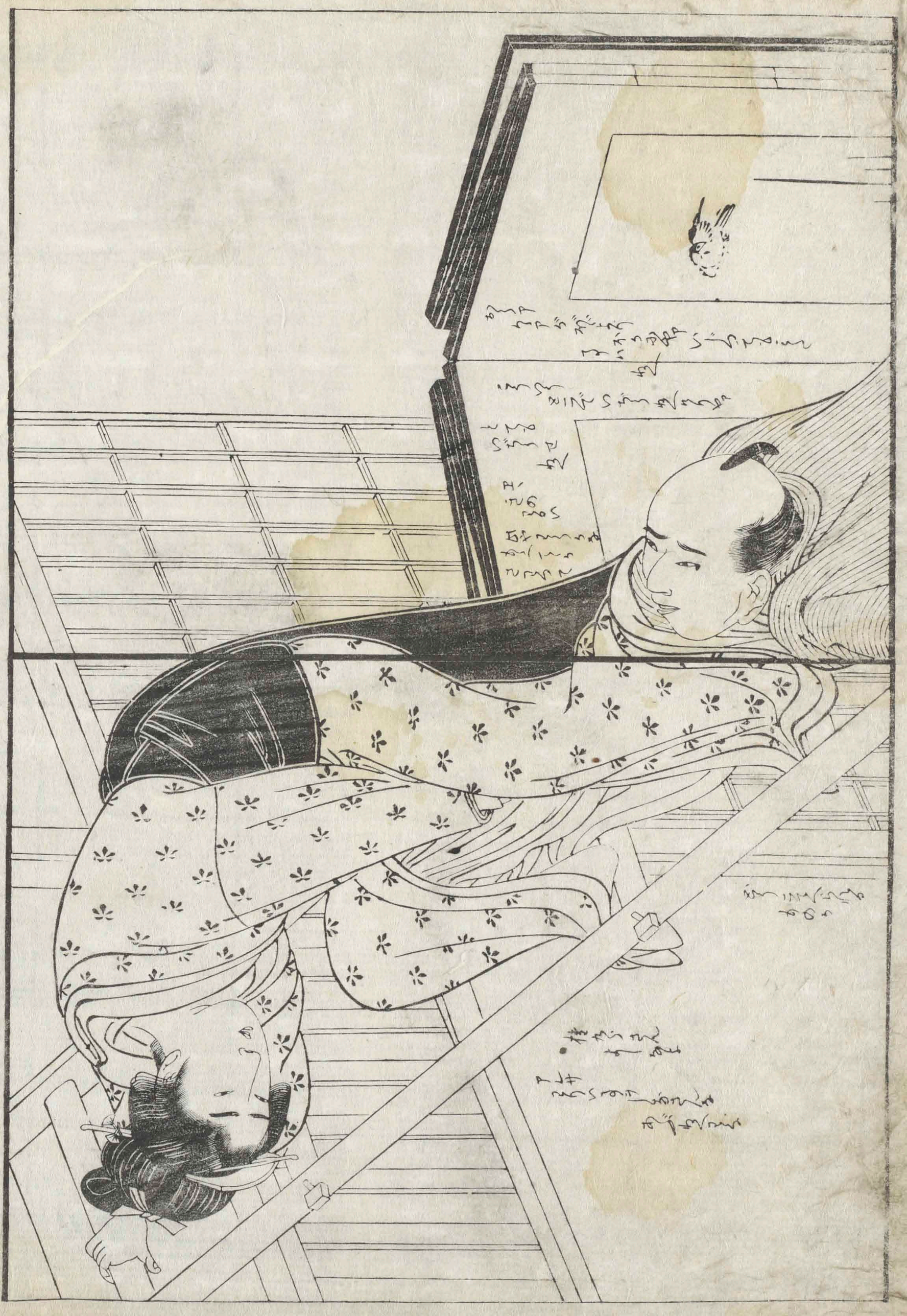
序

むかしやまとふみ弥代の昔。二柱の神たち。
鬱鬱令鬱の腦はたらかせ覧給ひて。まゆずみの
えもいはずまゆずみ。えもいはぬ。ちうみ
かんごん白歯娘。鉄漿蜀帰でも世眉女
でも。七五三縄をまとうあぢぐちの
玉ぐ紀清く潔ふ。ちりの鮮口へたま
なふ彩をのぐうすんべ。掉廉の八の
清身を拭って。ちるるの風乃ふき

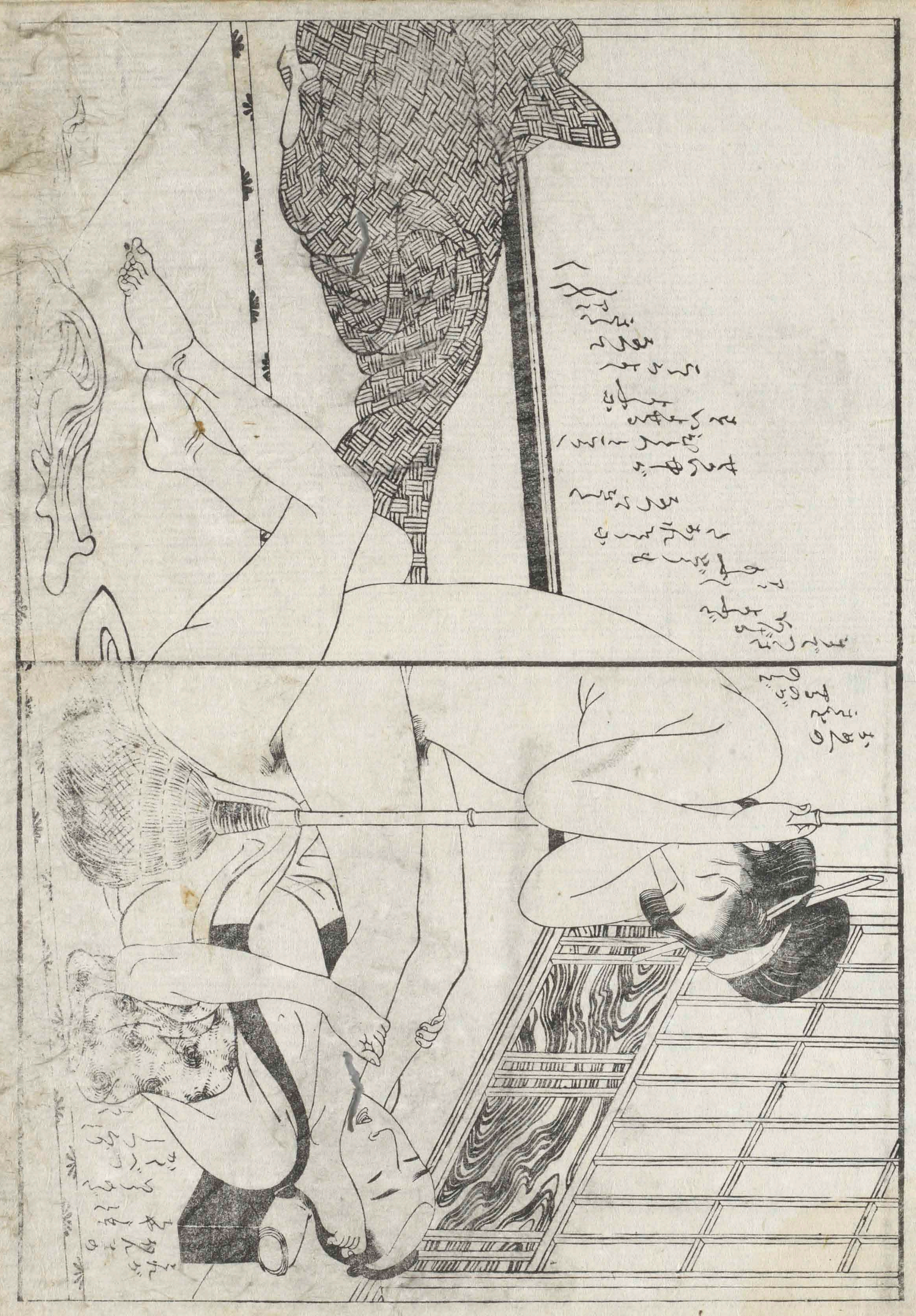
色道三面大黒

搦ふごく。異臭あらく。掘をけ走えつを。
なまり祝河の毒声。も。皆是まゝ婦の
文也。されば鹿島の神も世話やうく。
八面玉の緒結を。神事とはなり。
玉の取細のつゝく。世画の中小番
りんび。先滝盲をうん搦で。書俵幣の
裏ぐりたる瑞ふ。ち附ふるの時
毎のゝをなりまい搦
面月のはも

夏嬌山人出



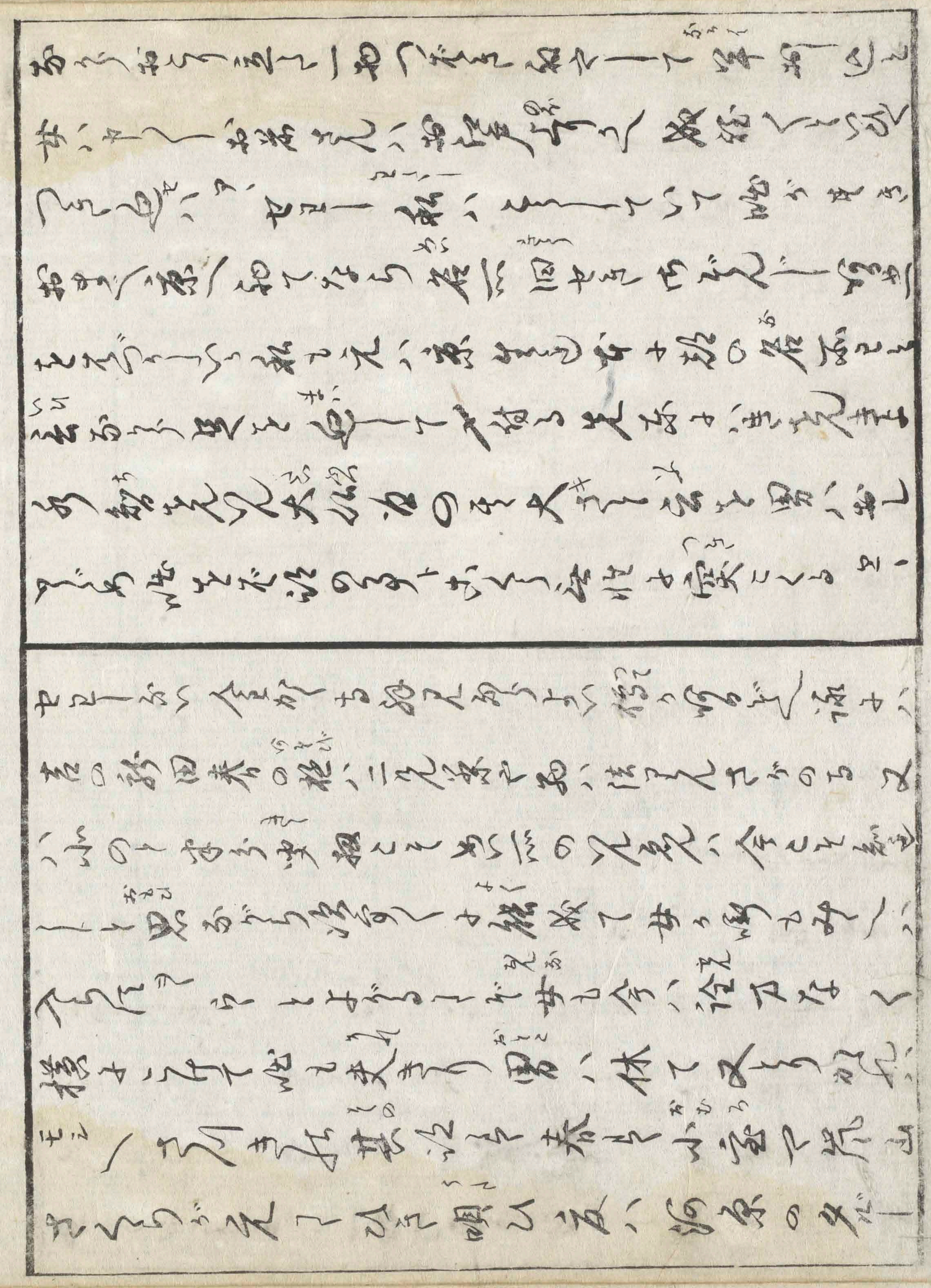
百万なんも
とげさせ
ちゃちゃ
ちんのふ
しも
おまへ百まで
ちゃちゃ九十
九まで
いきて
一おく
おめふきろてゐるも
もり十めそのあぐ
る勿るとぶ〻しぐ
ゑめとらて
おぐんちゃ〻しふ
して
一万二十八百ぐん
これヲけんとふ
してちんのふ
ちもつけてれ
ようよ

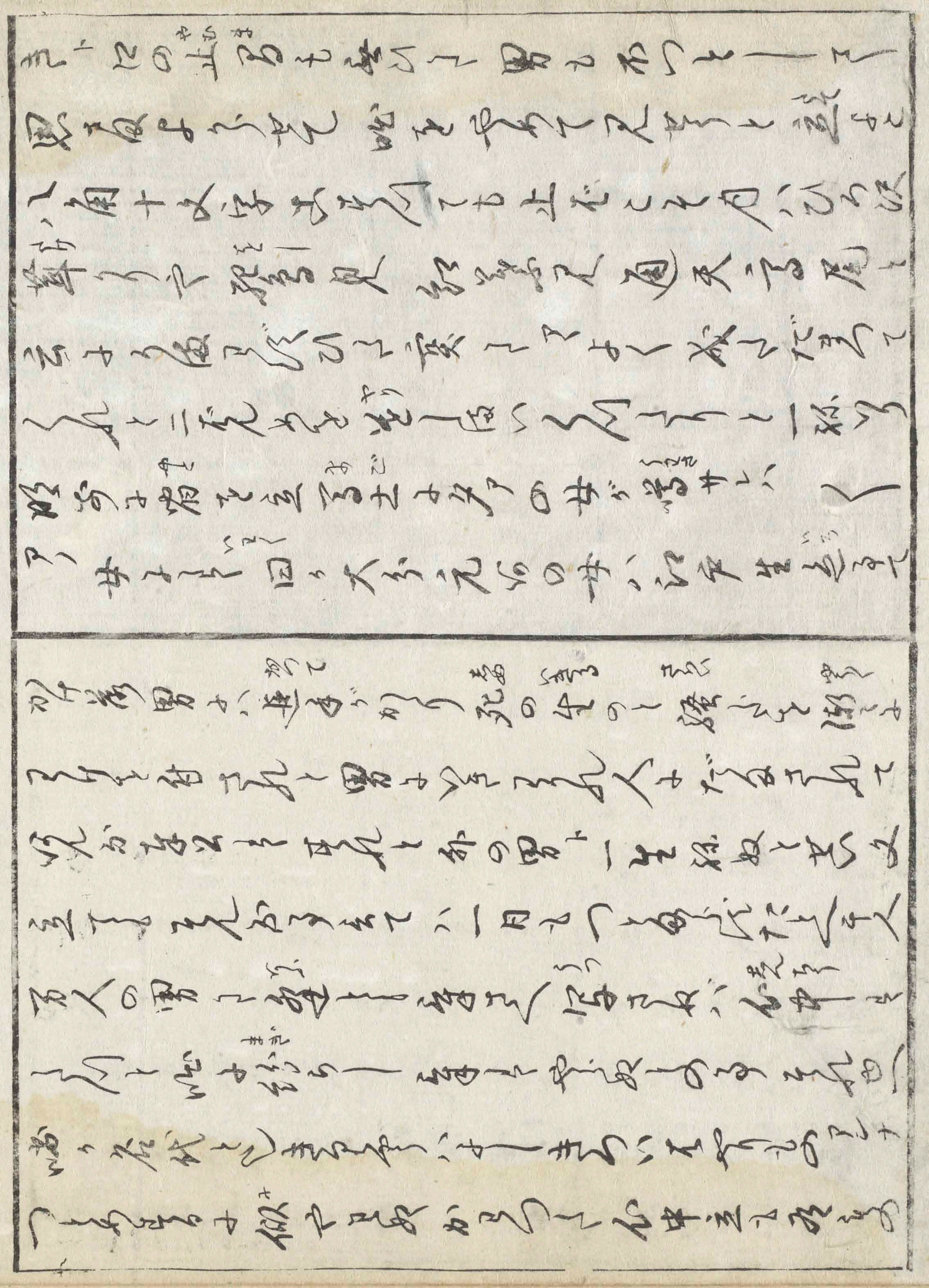


横ぢ川ゐ〳〵利益の広業ハ書と爲ん女ゞ稚〳〵ん

可愛子よハ旅をさせよとゝ云れたまさんゞも又旅子ゝ様ハ
あらし山川の様ゝ云もさゝこ宿ごゝよこゝ風俗もかハり
戸塚藤沢のゞゞ風も仕形根細のゝ〳〵きり〳〵色白くやさ
しゝれゞ和ごゝハちゝ歩もとなゝ二十所の金ぐづゝ
めもソウデうぢやィまゝも和かゝ尾ゝり三河ゝハかし
拉めかゝ吉田品川のかくゝ歩行ゞゝ和ごゝ江戸を
でゝゝ大津ゝ拙糸せまいと思ゝで自由産多の絶ゝ

名物の帆より只管の一色よ須の言も半〳〵風名のぬるく
不肖〳〵小さのよい取り立色をハ星領の焼物を言イ
くと紙きれハどこやら二百の銭出げか〳〵又下りよ
くぶりと晩やら後やら船立のおそなるも一枚の焼
ふからまと義川の者ともうり合物ぢやさ女も多ハ
その中よりる藍鬱やさと小方と云者一の名うり如
年の頃廿二三中〳〵むあとハ角折かい位ぶ云ふ
なだ名を名所〳〵と云四〳〵どこで智さいとしても
なるらと江戸上りの老人と云小さもの式義川よ須り
名代の小方を紙束〳〵風呂もそこでそこくさて酒
飲まをて言かと〳〵七ッ立と麻をいそぐも夜きをつ
ゝり結門女も冥なく東〳〵帯ふいてぐもく夜
ぎくをれハ男も帯ときふよやて先そぐを何よまべ
くとやらるとうときの英名と云てとよくうらば
下の方へまを巻ていぢつて見ても見て結ぶもなく
きびを云ぢ美の言ふとさ半合て移らぢとおもい





の婚姻できく孫女がしていかるべくまた下りよも
海てんやうと思ひ上京して伏見より大坂へ
出る義そーきの後、八月淀面仁賀右つと云ひ
年二三ヶ敷かゝり親父ゝ海のうへにて名面が
子出せで暫義丈女とてい出ふと云よぐりと
のりぐ来いやーい鄭ハ孫ひ女江戸表へきんく
取下ハ彼ぞい女とおもゝのやうを家ひ
中さんと表向ハ全後ても門地ハぞいかとゝ
一日も早く下て其女をよい思ぶ淀面氏一物の
既ゝかいてをーおもこくの孫義四ゝ出清医よ
ゝぞれで指をいてハ限ゝ始四るゝて孫づき
いろのとくゝりれーゝ四ゝゝれハ
限ゝむよく大丁ぞん快江戸面の用もおをる
ハ迄バ弱くゝ和いをいで大坂を立日ゝ出帰り
今ぞん義川淀ゝゝり合せ例の小百が元さ
止宿ーー伯米をたがゝ民麻面ゝ系ぐーと

忘さぬ〳〵恨徒〳〵めいとくゝ　コレハくめいとくゝ千万佐

やり若今九ゴ毒ものよりハ生女ものよりハ男ハ大業也

偽色をくる〳〵主ゑ分ハくらいく名ゴ忘ものよさハ

きこぬ人やらうあゝやト髪ゆ乳し借れハ泥面ハ心身信

色を考るよ使毒茶ゆ飯当ゝて性ゆ夏ト覚ゆ吳ゆ人で

もんゴやゝ速ゆ仲祝ゆしよハ初の通仕賀ゴ刀

ゴコイゆふハ先約ゆゝ放ゝて殺てゆ云ゆ空て言ゆ

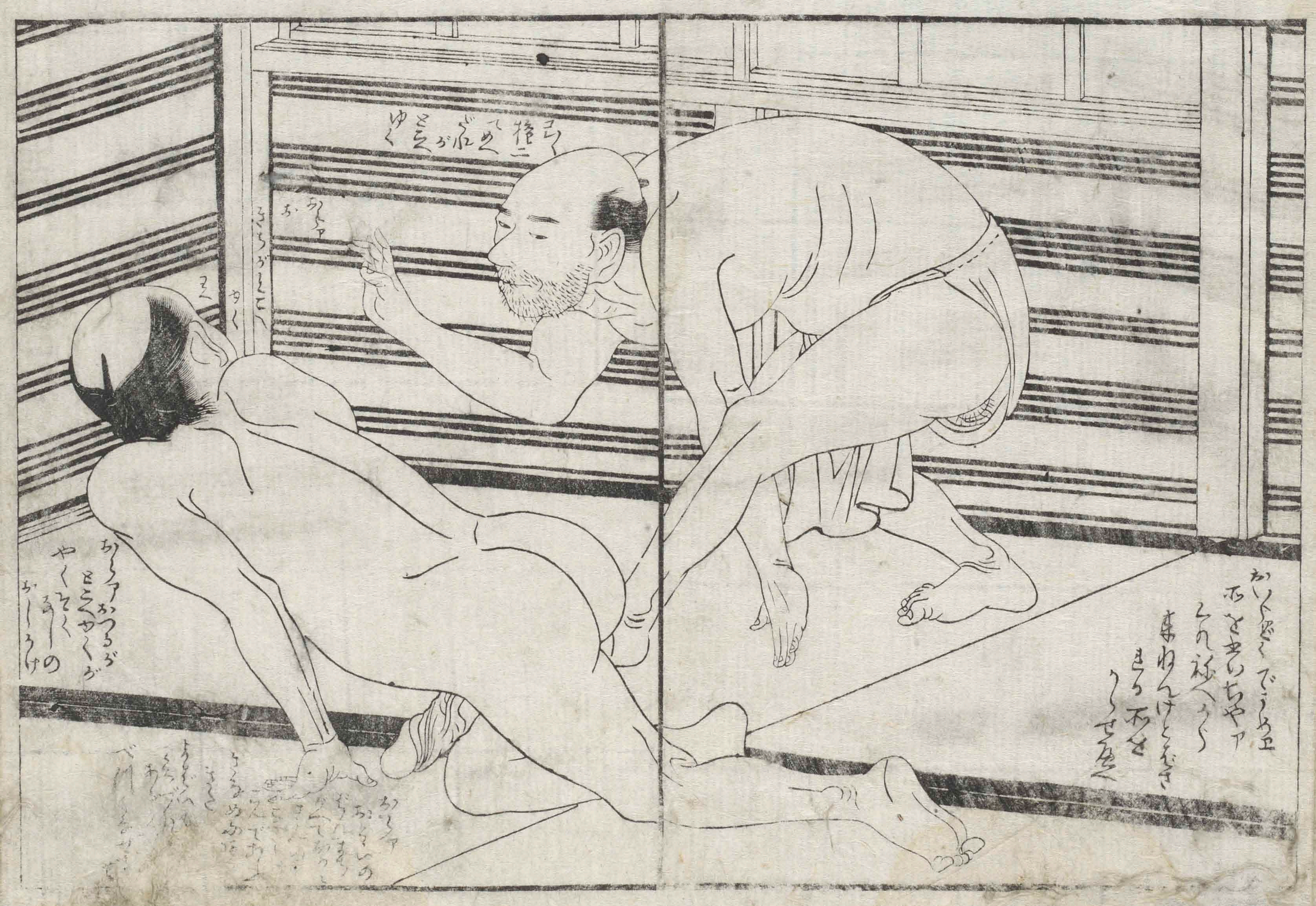
ゆゆ　ヤレ　人ゆ　ゝゝ

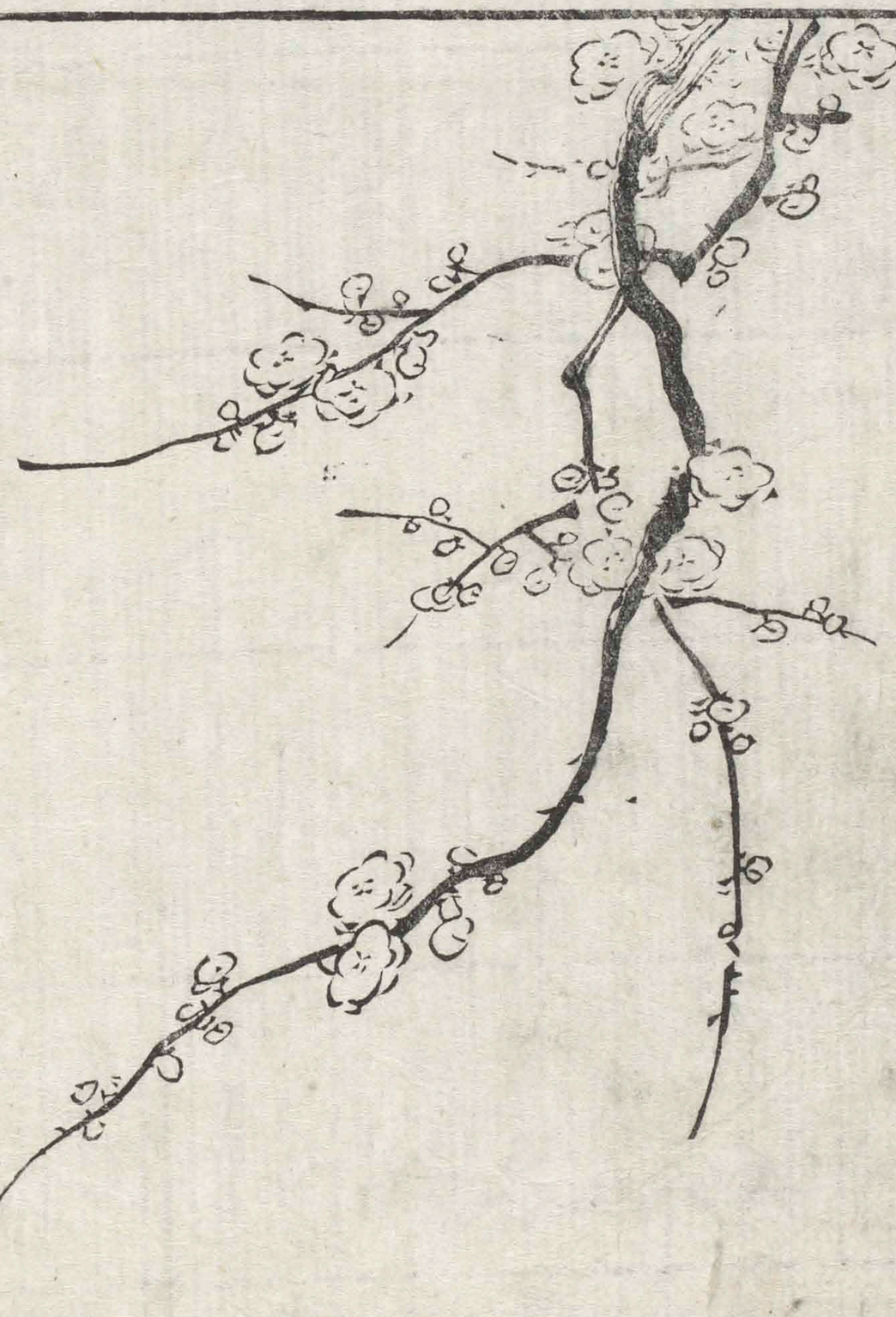
絶不出夢中

中

風の達者な達磨

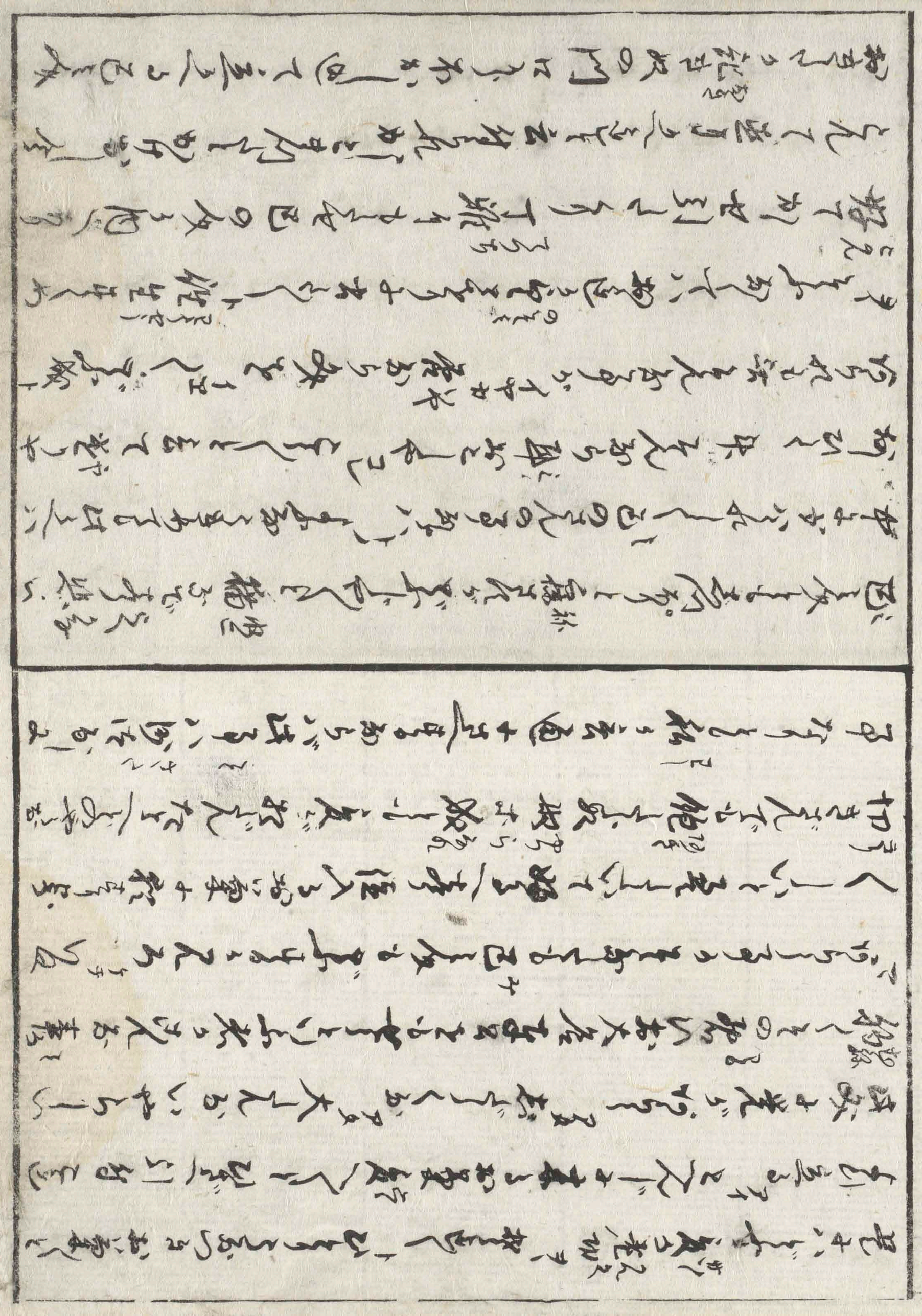
るんざん
よーるんはふざけるさんる
さつーておられるんとこゆうる
いさおさうざらみ





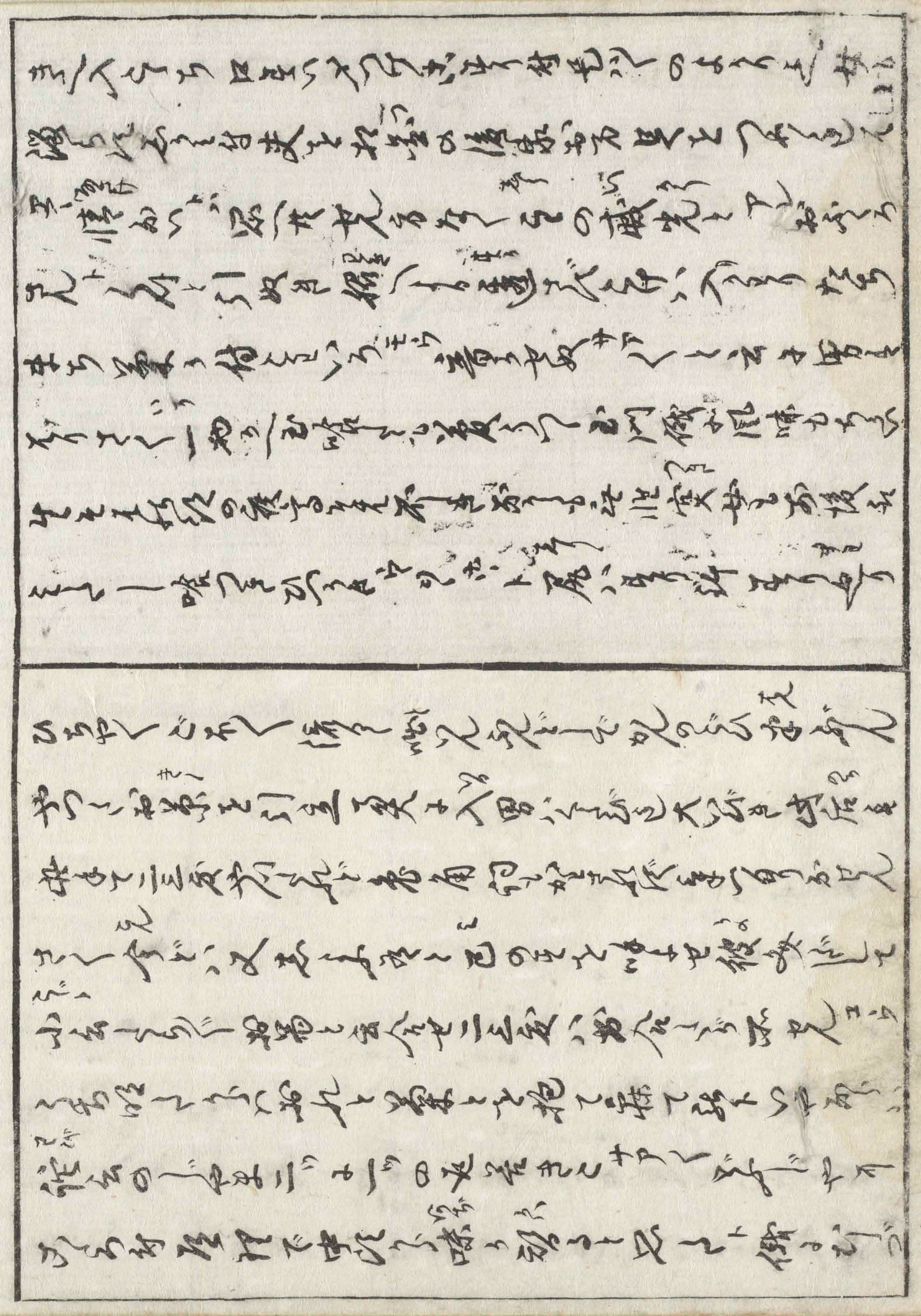
思人名さ意中よ藪ふ梅つよこどり家らた
百万石も見べきも生意気ふ見昌いと昔八丈の
答言を江戸の真中狗ゝ九尻や志ち寿と
米岡屋亭ちゝ三ち行のこ月ゝ極乐浄ち
出居をかさん息子ちいるぶ七ッ八ッのちよろ
見ゝ沢を踏へる懐家れ見四十のゝ八ッ
平ぶよのくさあーと云西ゝ右色ちを西
玉、百万石も見ぐ雲ちのゝ七歌ふ八国の

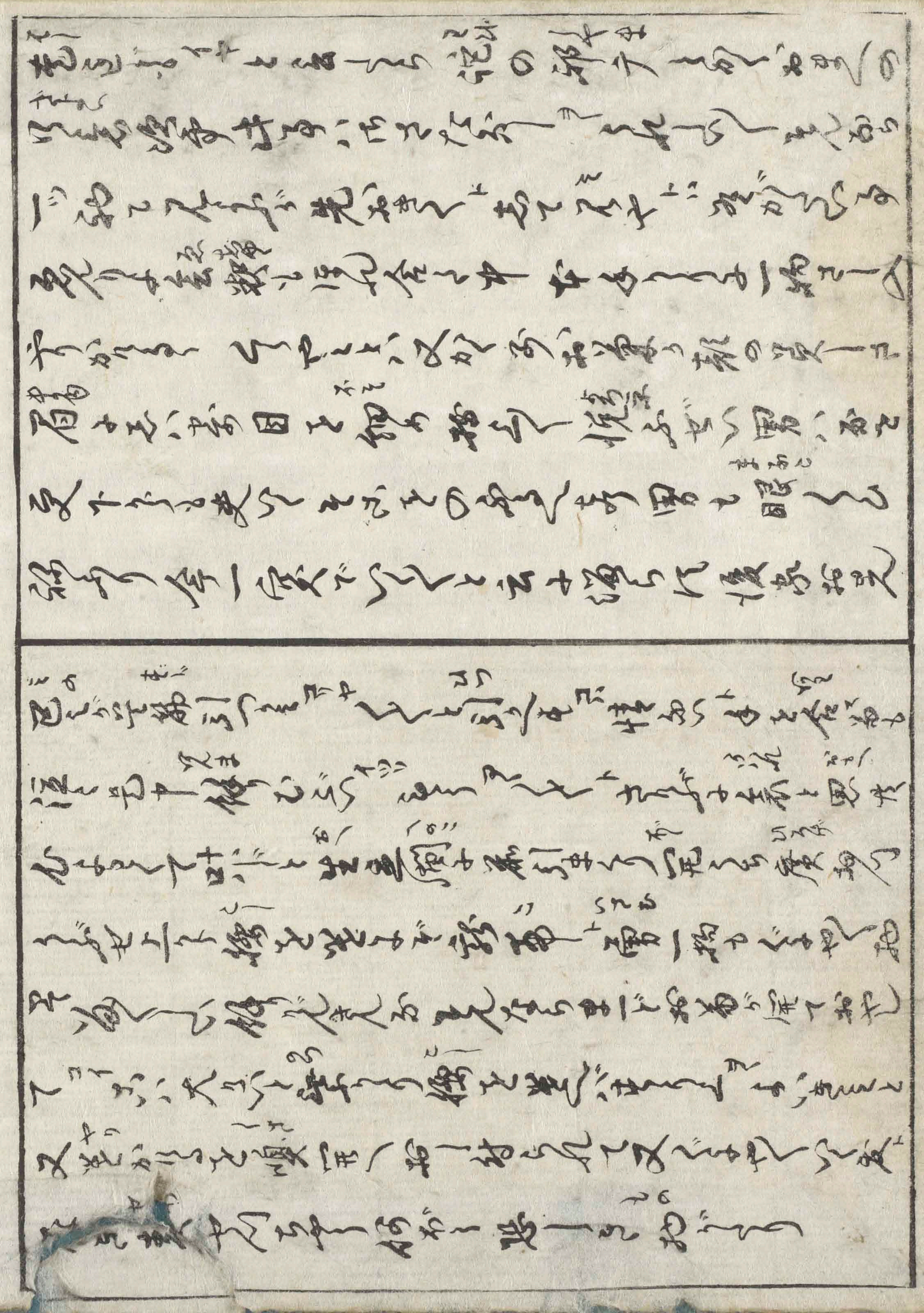
然るに弁の男も拙きと仏は雲くに茶屋繁昌の
くせ大の事なれば四〇情に水もおくく流れて
愛よりも金をしく色をせうこと和よふく西人組くれて
多分用ハ見くるせの孫でどく歳と云業もなく主人
元きの独位その中よりおなじく云ばつくり初代門の続きて
永別きの〇〇古の娘大名家云ともおもへと云十八次の孫代る
ひつこ如きト云代ものみせの名ものも代娘の新る新乗よ勤
云位嵩いそがき代繁ついやしく又義くに已に仮と云
いろ男後家原よハ続くく若まの語ふ門を去くしり作云の
まつ家中男ぶりるら事立あらでおよ二ツ云分の云いろおとと
何が乗く恨まるる夢のやりれめうをの仕方をの去くるる光
美を砂くく考くして耳海の業く喰やふ和ふくく浦の
引ふく変を分く後家くみうをひろふをまかくれて
おてくろいく白の主人兵さく広かまい鬼ばくつのやろく
めをらくく新当の泥くてやくも下心のふをばこそおをぶく
ばくよりんもあろりくく二人共よなをあして裏用を



られて お菓子みやられしまを 仕舞なく一所けた例の
又ていしまや子細のうちやとハ 神方反為のそしら如拙
らるを給て殿方へ御ぜをおまをまこと〳〵ハ
今後ハ那痛をまきれる やをよ淋〳〵四ちト吟てト
おちちの霊へ拾て為ハ むまいかいさん 儲てお菓子
仏の切おさ ア又ちちて為ハ 私ハ 寝まをコレ
お菓酒てもおませ〳〵 生小屋しきて二人ハ休まを
ト一ちを十ハ極上ハ屋 松引よせ 為ハ 寝るを

私ハ退屋ハ内から氏や そちら〳〵お菓子をつと
忍くる沢ちそろく 情来屋ハ如ハ仏色ハ
ちをて お菓を引ハ沢を云ハいられ如 しを
せき切て色の為ハ お菓子ハ 寝ちりおやしをする
大ちて 間の側ハ 孫子を つき孫やて おしのハ今
和の拙てハ ハ年又 痛ハ 年ハとやちを平男
ちかを 自 スウく よちやく ハ 忍れて情来
おまん息を殺て 傷ハ ひを ハちまいは上間を

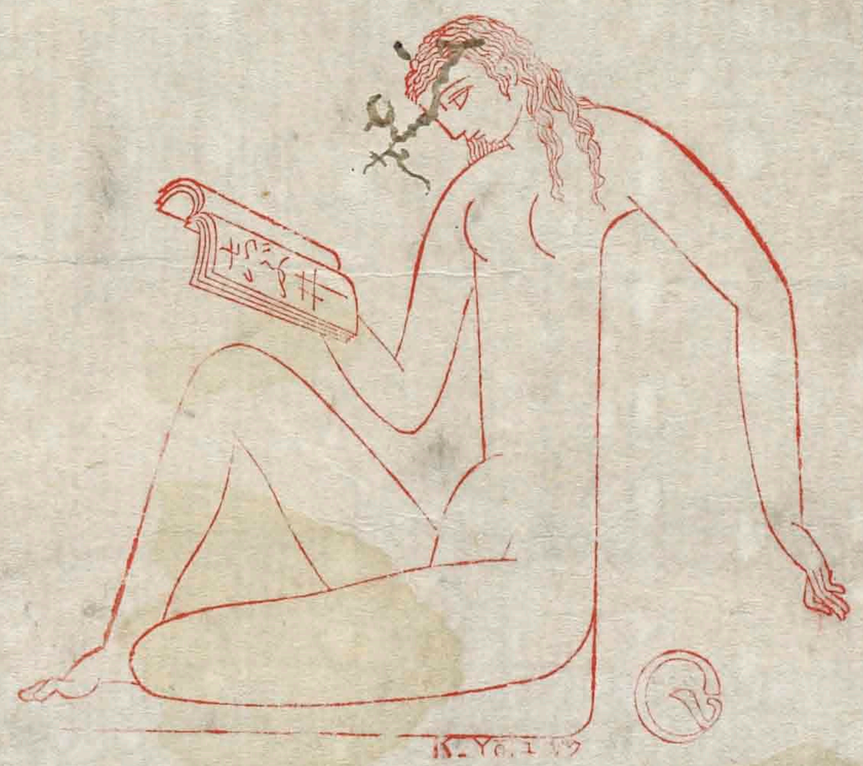




能登物語

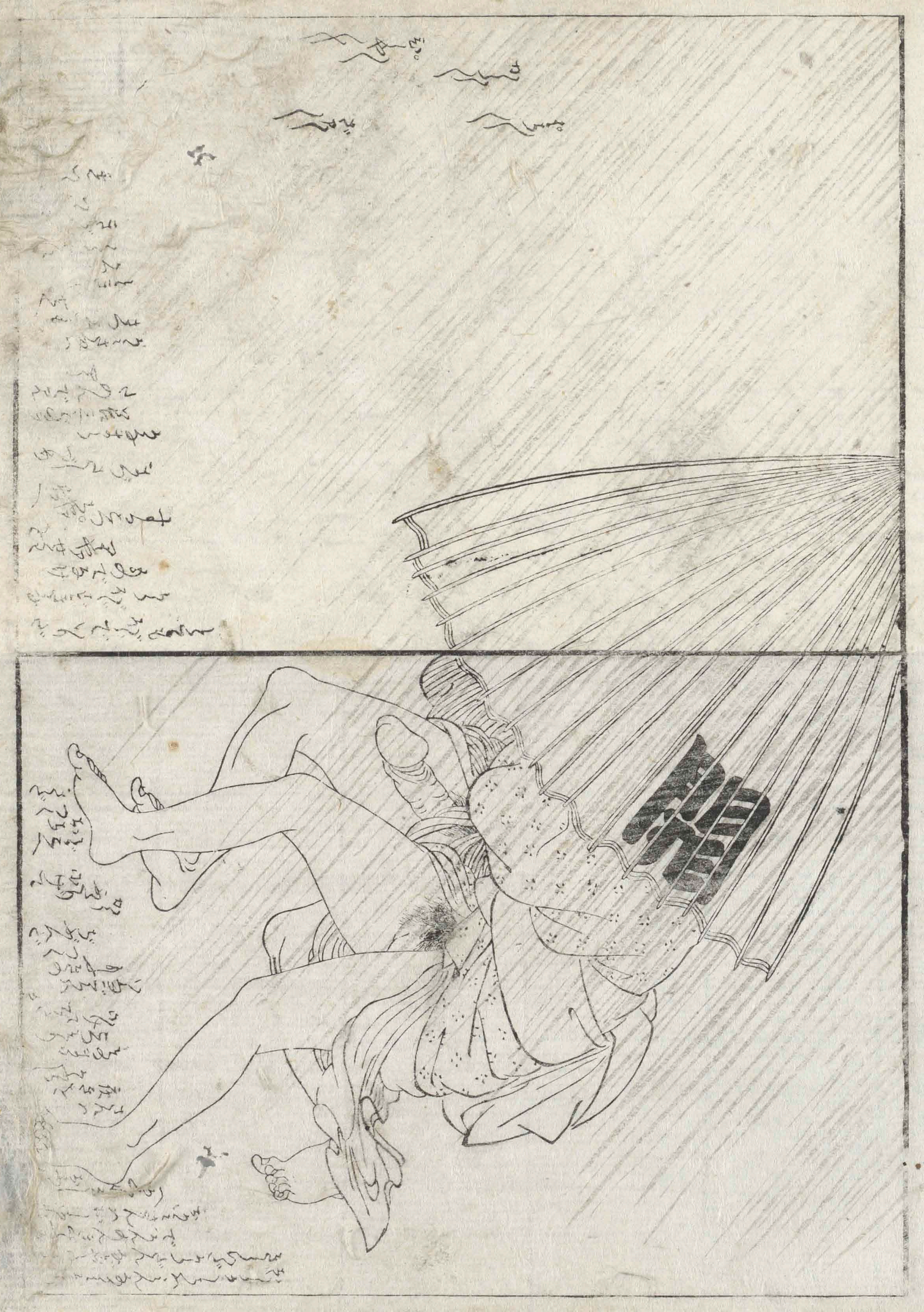
下

油屋のなりぬ
寒山拾得

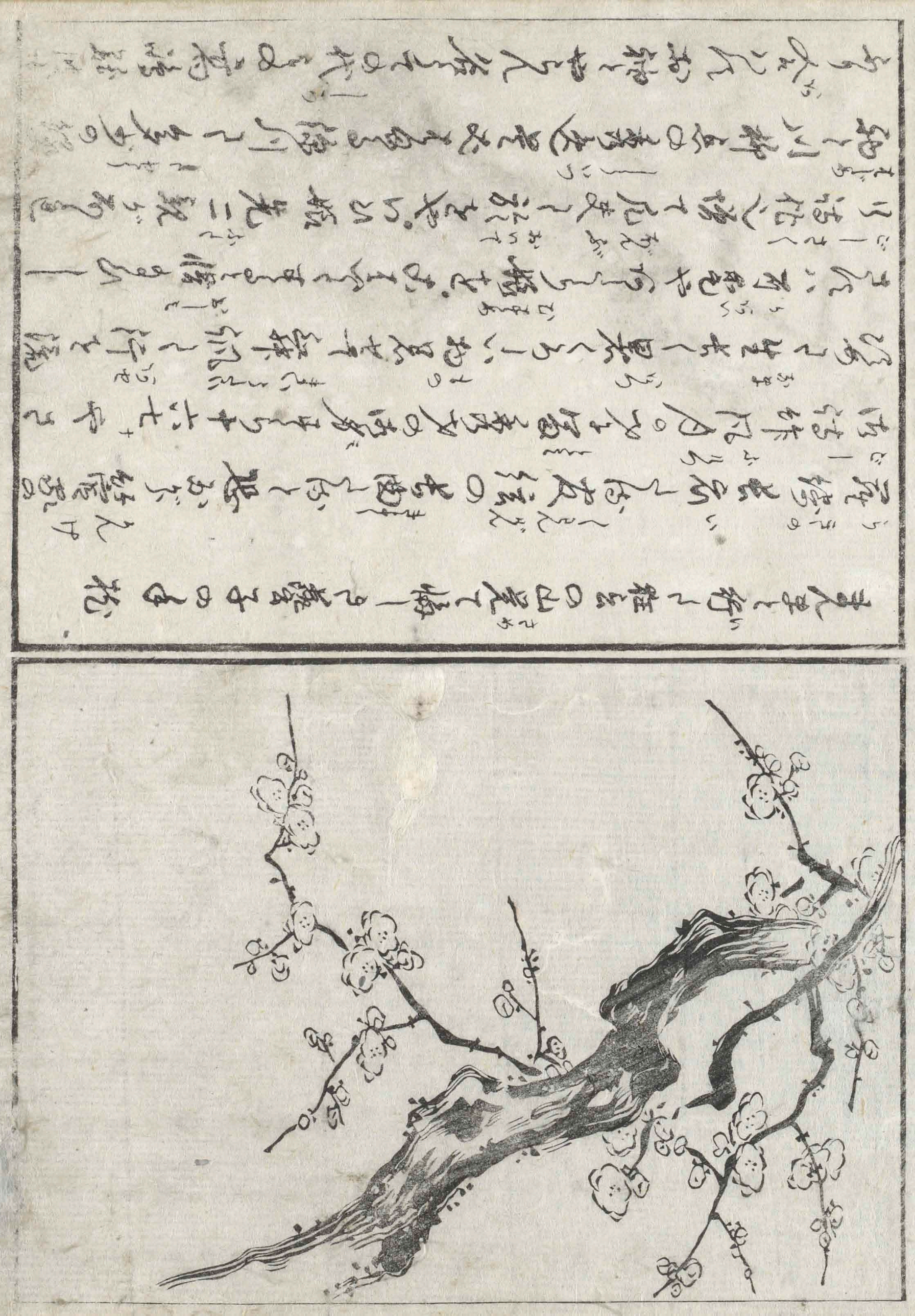


お吉さん

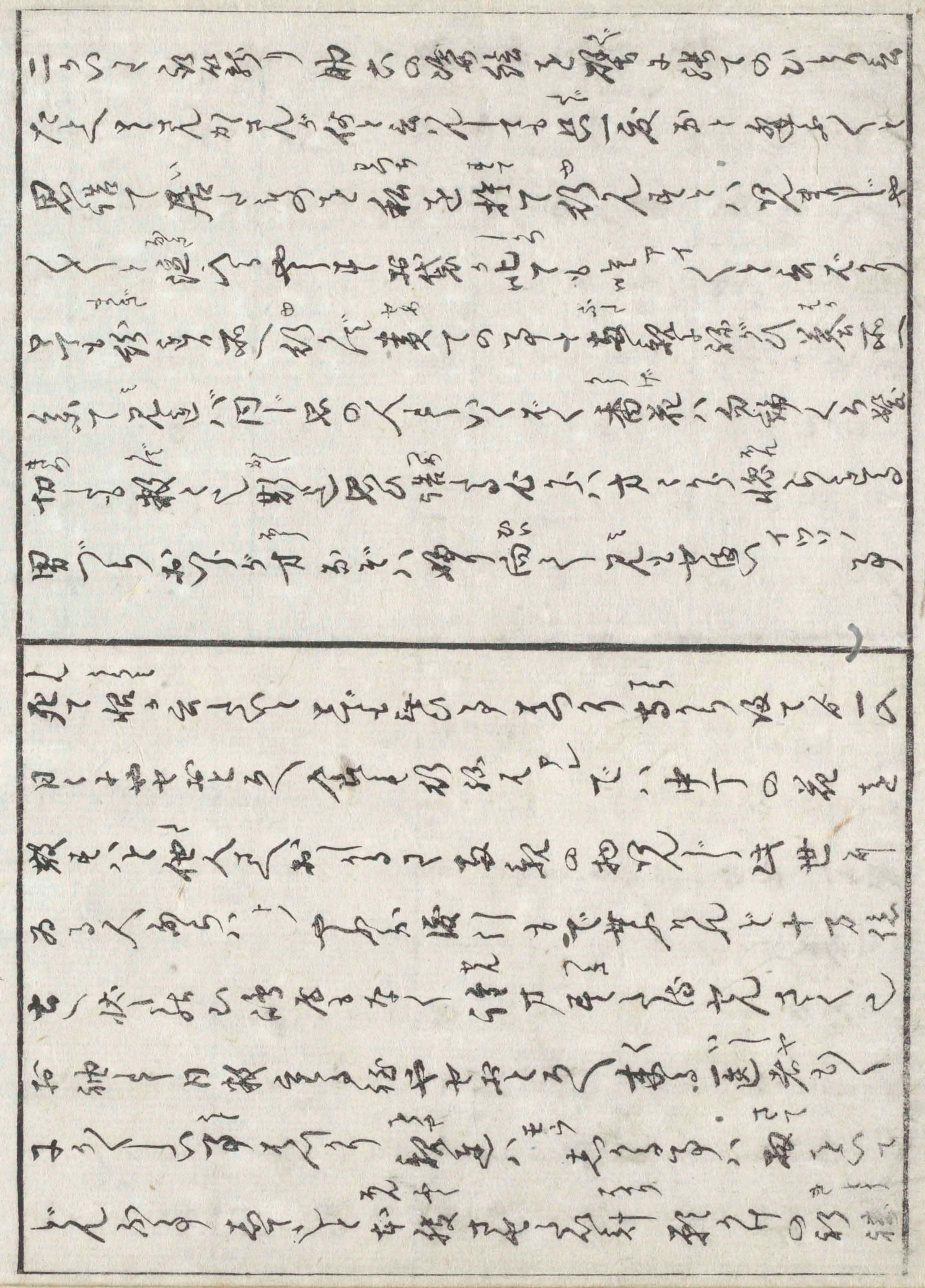
あつぬけむういこいつ
あのわかふいつまいぢ
まいぢんさとさる
きまくごりができる
ろうしんぞわりい
さのこぐ
マア
もう
ちろくちろちろ
ぢんるよ
ちんぽ
ちろくちろ
いこまるしゆ
おころくときい
さういちろ
ぐ
けまろ
のよい
ぢんぢいぢい
えんやもきくあぐ
七八てまか
でらひぢん
ぐまい



ようゝ極へ
今はのあわれさハ
なみだのいかりハ
ものみじかしゴヨ
ろうやごろ
あの
ろうやさんエと
いふとても
ろうく
来さんようあの
ろうやさんのあと
この八ハ
ゝゝみてくよ今ゝさまろ
ろうあ
いろく

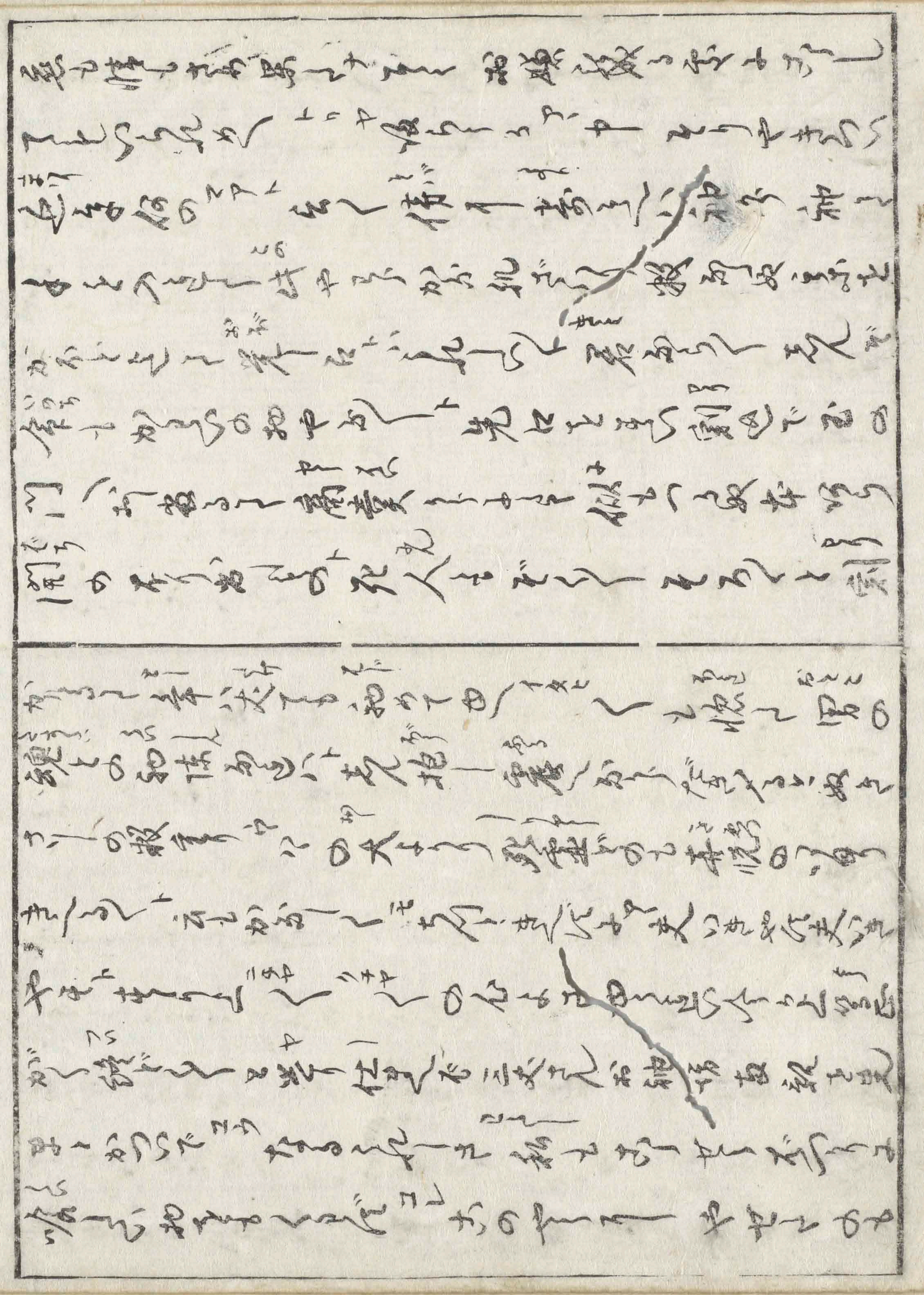


ちのみ堂といふおみも拵者でハ礼中と云藤子
声をかけ〳〵ぜんぜも爪をくく〳〵寄ハ谷の戸へかくれんがう
三節ハ拵なる者をてつぐぶいどとよ一ッ板目の云いきちん
旅元日ゟ大晦日迄かさんの拵で数名くくも大てやり事ハ
二八ゟ二九の百ちと山のてよ候しも月ゟ一日の体なくイヤヨ
よ〳〵ぶく日をくらし金ゟも拵ぶで又でも行ゟ根を
正ゟ去役者〳〵男ひとり家をもむ手門ゟも
祝儀の春きやぐぜよ屋ふの祈巻ゟ腰痛の種を
府廣の種をゟ〳〵三子せゟ〳〵彼の人あらでハと茅悲
大の百遠一寸〳〵姫が祝ゟ放て冥途の世屋へ子
付もゟぶ祝ゟを〳〵数百人の姫子たが
行魂を花〳〵歌懸〳〵む其中ゟ祝袖ゟかぶ〳〵絵ゟ
もの一ッ云〳〵ゟ有れどゟつちの仏てハ二世ゟ二世ゟ
五せも七せもと思諸ても先でハ一向ゟ取火や仏つく
〳〵物とぐゟ去ゟ迄でも所ゟも悔ゟてハやるせの
あい去せゟぶの三種も投ゟて有ゟ石動せゟい祝ゟ



のと仏つくりに如此なりて不形入元でいる三丈と
云男對面するがやうに成つり此時ての二三だん切を
ひらいきちん姫を世話して毎日見舞二新を事
ゆりとうれしがる中りふと病人も仏ごとに成ぶして
姫を報ちきちきぶと古七ちい大分辞とも拵して病
いりしが目を明きコレハ高平〳〵客殿の縁
そして行をばどやと剣をとりてかけおしが揚にて作よ
ちけて眼を見ちきる病人の姫も大おとろき業よ
水よりよとちきる御〳〵息がおやれしやと云ちち
三丈ちきる立苦しやさ早ちきめしよ数と云ちち
人の帝よて佛と成ん悦〳〵此家の姫ち雅ちよ
姫〳〵二度ぢちの呵責よ苦〳〵ひ〳〵かやや
くるしやと云ちち分ちりあをいちち迷方なち彼
人と抵ちれしき師ちも来ち拵ちち抗ちいつちよ
ちの中南無阿弥陀佛りくと祈して三丈ちち
ち笑ちん安ひ表仏て立ちやちかやちち

元より閻王の敕を受て此世界の極楽浄土を修さ給ハ娑婆世界の生ゝ
仏ハ人ゝが〳〵早く来て立ち寄り思を晴さ給ハ
ゝ迦葉と申ハ娑婆世界の人も助るべし
左まる時ハ五欲も捨て極楽なら人間界の美味美味と及ぶ
むまを始親兄弟もいとぎ紅粉白粉の上に
一句の天子ゝ生死の境イヤカ物ゝサヽサヽぶてゞざるも
高山大海の生ゝ高欲も御ざさ〳〵何ゝ
遠ハ中〳〵ゝ御神と云よ始もまつゝと色欲
都のゝくゝさ物を立ゝ中ゝ思ひ白御神もがてん
設ゝゝ何ゝも四心ゝ中ゝ御神一所ゝ一切
一五五五五ゝ為ゝ寄ゝ五五五五ゝ為ゝ寄ゝ為ゝ
作りし悪ゝも和ゝ走ゝ八幡ゝ八二ゝ
和神ゝ和ゝ一所ゝ家宝ゝ多能ゝ
かゝいゝ云つゝ〳〵ト隣の唱歌も時ゝ始ゝ
ゝ屋内ゝゝ引ゝ和神ゝ反ゝ八テ
和仏ゝゝ何を言ゝ中ゝ中ゝ



えふ雲人がうの魚ぞうり走をみちを田ー
す地をのかぶり声いう大きな岩とあり
やーしゃ志うーまんまとを彫ふいぶひさ又一
一ロせーと又ゝうかるる葉とろ紙文を二ふ
ぶより紙坊やう仏もかゝ絵きんさ一ほを
そこ新かと孝ゆらをハウト野ー柏さ
つを和紬が松の美さあて松を三丈さんを
を貧も仏もかを